

青少年らしき

家庭版

発行
倉敷市教育委員会
編集
生涯学習課
☎ 426-3845

1月



「地域全体で子どもたちを支え、育む」

「ユースセンターまあぶるでの活動を通して」後編

令和六年六月三日にきらめきプラザで開催された、青少年健全育成講演会の要旨を二回に分けてお届けします。講師は、NPO法人manabode(まなぼーで) 理事長 森年 雅子(もりとし・まさこ) 先生です。

●学校でも家庭でもない居場所

我々が運営しているユースセンターは、「学校でも家でもない、若者たち(特に中高生)の第三の居場所」として、放課後や休日に子どもたちが集まって、色んな大人たちと色んなことにチャレンジしながら学びを深めることができる場を提供しようとしています。そこには、「ユースワーカー」と呼ばれる、先生でも家族でもない、いわゆる「ナナメの関係性」と言われる職員がいます。

学校のこと、家のこと、友達のこと、お金のこと、恋愛のこと、うれしいことも辛いこともしんどいことも、ありのままを受け入れる場にしよう、我々も研修を積んでいます。子どもたちが主役になれる場語り合える場、地元の良いところを知る場、新しい出会いを感じられる場、世代を超えて楽しめる場となつてほしいし、また、真庭市には大

学や専門学校がないので、学術や社会に触れる場所は魅力になるんじゃないかと考えて、ユースセンターを運営しています。

子どもたちに話を聞いていると、「修学旅行で告白して振られた」って言う子や、親に話してないことを話してくれる子などがいて、少しずつ自己開示してくれる子どもたちが増えてきたと思います。

「学校でも家庭でもない居場所」がコンセプトなんですけど、重要なのは孤立してないことだと思っています。ここに来ている子は、「学校にも家庭にも居場所がないんじゃないか」と思われがちですが、そうではない、学校と家庭と三者で支えているからこそできることがあると思っています。なので、この場所で、多様な人々と出会い、学校での学びのアウトプットや、やってみたいこと

を自分の力で実現させて、それをまた学校や家庭で実践していくことが重要になってくると思っています。

●子どもたち中心の運営

自分たちの居場所は自分たちで作って、交流する場として機能するように、ユースセンターの内装や、たまり場としての仕組み作りは、子どもたち中心で運営してくれています。立地条件も、久世駅からすぐ、徒歩五十メートルくらいのところで、バス停も近くにあります。近くには市民が運営するコワーキングスペースがあったり、駅前でマルシェが行われたり、古民家を改修してシアターを作っている方がいたり、C-1トイレがあったり、様々な面で、非常にいいところだと思っています。物が置いてある状態の空き家を借りて、改修して作っているの、物の処分からスタートして、床が腐っていたところをみんなで改修したりしていきました。

空き家問題は、真庭市でも非常に問題になっていますが、人を巻き込む一つのツールとしてリノベーションする中で、様々な経験を通してたくさん仲間たちができていくことが非常に魅力的でした。一階は、美術部の子たちに絵を描いてもらって、デザインも学校で考えてもらいました。

最初に巻き込んだ子どもたちは、一人目

は中学二年生の男の子で、この子にはこちら側から、「ユースセンターっていうのを作るんだけど一緒にやらない？」って話をしました。この子は、友達がいなくて、反抗期でこじらせていることを両親がすごく悩んでいた、本人も、友達がいなくて、クラスのグループラインに自分だけ入れてもらえてない、と言ってたんですね。声をかけたら即答で「やりたいです」って言ったので、一緒に活動するようになりました。

その後、高校三年生で美作市の学校に通っている女の子が、「中学時代は不登校だったけど、私も自分の学校の近くにこういう場所を作りたいと思うんです」と声をかけてくれて、一緒に活動するようになりました。色んな人が関わって、仲間もだんだん増えていきました。子どもたちの欲しい物リストを外に貼って寄附を募ると、地域の方から寄附がありました。地域の方が声をかけてくださって、色んな交流が生まれて、子どもたちが自分たちでお礼もきちんと伝えるようになりました。

●なりたい自分になっていく

このユースセンター作りを通して、学んだことがあります。最初に、大人たちが安心安全な空間を子どもたちの意見も反映しながら作っていく。そして、ナナメの関係性、親



味野小学校 5年
古谷 英心
(令和5年度)

「レンコンの穴」(水彩)
実物を見ながら、ていねいにかきました。かげをつけたり、色のぬり方を少し変えたりして、本物そっくりになるように工夫しました。

でも先生でもない大人たちが、関係を繋げていく。子どもたちは、自分たちで繋がっていく経験をするうちに、探究心や、自分や仲間を認めてあげる力や、創造力などが培われて、なりたい自分になっていく、ウェルビーイングの実現に繋がると思っています。

我々が受けてきた教育で、どちらかというとウェルドゥーイングの方で、「どうするべきか、どうしたらこの人が喜んでくれるか」って、人に気を遣いながら、正解を求めて生きていくという教育を受けてきたんじゃないかと思っています。子どもたちには、自分がどうあるべきかしっかり考えて、どう生きたいかきちんと向き合わせる。それが大人の責任かなと思っています。

居場所が欲しい子ども、電車の待ち時間が長い間、ここを利用したい子ども、遊びに行くのが遠いからここで遊びたい子ども、そして、最近は、学童が合わない子どもたちなども、ここに相談に来ています。「いつも

どんな一日を過ごしてるの?」「暇なときどんなことしてるの?」「どんなことができるようになりたい?」「学校と家庭、それぞれどんな場所?」、十代の子に向けて、スツツがこういう会話をすると、自分のやりたいことへ背中を押すことに繋がります。

また、学校の先生や、保護者の方に対しても、「子どもたちにとって学校ってどんな場所?」とか「子どもに経験してもらいたいことは?」など、会話の中で聞くようにしています。

● あらゆる人に切れ目のない支援を

子どもたちが、空き家の改修から色んな経験をしながら、自分たちで作ってオープンまで持っていくてくれました。オープンの際は、真庭市長と真庭市教育長も出席して、中学生、高校生と一緒にテープカットしてくれました。

今は、子どもたちに地域の人が声をかけ

てくれています。それから、最近は進路相談に来る子どもがいたり、大学生が中学生を連れて遊びに来たり、高校生が会議をしたり、ここで駄菓子屋をやりたいくて、店長をしている中学生が、小学生に「経営とは?」という話をしたりと、多世代で交流があります。

令和六年度 真庭市に通っている子どもたちは、昨年度から比べて約二百人ほど少なくなっています。その中で、昨年九月にオープンしたユースセンターまあるでは、約半年間で、延べ七〇七人の子どもたちが利用していました。

スツツも資金も不安定な中でやっている事業です。やりたくても実現できないことはたくさんあるし、こういった場所があるということが届いていない子どもたちも一定数いるし、知っていても外に出られない子どもたちも中にはいると思っています。

最近で言うと、働き盛りの若者が仕事をやめて、行き場がなくなつて、このユースセンターに五名ほど立て続けに相談に来たこともありました。若者たちが希望を持って社会で生き抜くために、我々に何ができるのか考えさせられました。相談に来た若者には、小学生、中学生と触れ合ってもらうようにしています。小学生も中学生も、構ってくれる大人の話を聞くのが大好きなんですよね。子どもって、「何の仕事してるの?」と

か、「どうしてここに居るの?」って、遠慮なく聞くんですよ。その中で、子どもたちに説明できるよう、若者自身が自分をもう一回見直して、ゆつくり安心できる場所で成長していくと、今頑張ってくれています。

高校生の男の子が「少子化で子どもがいない、未来について考えて」って大人がしつこく言うけど、今いる自分たちを大切にしてみえないのかと思う」と言っていて、はっとなりました。一方で、「これまで〇〇さんの家族としか、認識してもらえなかったけど、ここに来たら一人の人間として認めてもらえて嬉しい」と言ってくれた子がいます。どちらも素直な言葉だと思つてですね。こういう子どもの発言に、我々はすごく考えさせられる部分があると思っています。

あらゆる人々に切れ目のない支援をしていく中で、私たちは、「昨日よりちょっといい今日を送れた、そして、もうちょっといい明日が来る」といいなと思って明日を迎えられることを大切にしている、それがウェルビーイングではないかと考えています。我々は、「生き方で繋がる、在り方を創る」ということで、どんな人に対しても切れ目のない支援を届けられるように、これからも尽力していきたいと思っています。

ご清聴ありがとうございました。(おわり)